

同人作品

北国旅居 秋山義仁

信濃川万代橋の橋桁の赤錆三つ何時とはなしに日本海

黒燿石割れてカミソリ風に乗り越後出羽陸奥津軽根付く縄紋

思い出す外れの家の婆様はサザンカ見ては放郷語る

午前九時月が張りつく西の空婆様怖がり死者は友達

旅人はいつもついでの人だから出しゃばらず邪魔せず歩く

この土地に雪降りしきり空見えず家は跳ね道からの細道にどか雪

地図からは消えた街道筋の繁華街昔は北の銀座と呼ばれた時も

影延びて薄く消え去る旅先の知らない街に星空の宿

雪模様日々の暮しが降って来る角の飯屋に客が二三人
風車の回る夕暮は寂しそう漁火消えて入る暗黒

三諦 石邊綾子

しゃぼん玉湯舟にゆれてゆらゆらと大海原の夢をみている
置かれたるワインボトルの影ひとつわれの斜面を転げていった
カタンカタンかタン短歌とリズムきざんでいる銀座線
飼い主を離れて私の臭い嗅ぐコーイケルホンディエやさしい瞳
転がった箸はそのまま思い出に少女の頃の笑顔とともに
試乗車の回生ブレーキ初めての感覚掴んで饒舌になる
麦と芋どっちが好きと居酒屋のどっちもキラいの声かき消され
いまならばまだ間に合うと言うときに誰にハンドル任せるつもり

幸せになつてほしいと願いつつ祈る日々には核はいらない
百億年前の光を浴びながら時をにらんで燃え尽きるまで

朝 井上省吾

朝が好き寒さ厳しさこの季節布団にみれん残すことなく
夜明け前未だうす暗き朝早くあれこれ浮ぶ良きアイデアが
朝早くとにかく起きて動き出す気付いた事を楽しくこなす
まず朝は布団の中で考える何をしようかこの時が好き
朝がきた新しい日の始まりだ戻らぬ過去にくよくよせず
過去は過去未来に向いて一歩づつ足場固めて進むことのみ
失敗を繰返ししてよき知恵がわいて出てくる無駄なことなし
朝は来る夜の明けぬ日はないことを知ることにより希望をもてる

朝だ朝まず始まりはここにある寒さのりこえ一歩踏み出せ
朝はまずトイレにいつてありがとう御飯を食べてありがとさん
いろいろと良き考えが浮かぶ朝一つ一つが大切なこと
朝日あび気も晴やかに気持良く今日もやるぞ心楽しく
一年は元旦にして始まりてこの日の朝はまた格別だ
一日の始まりが来て朝迎え二度とこない日この日のことは

不安定

信頼の上に成り立つ取引をうまく使って詐欺起りうる
世の中の争い多く心配で吾は願いて平和を祈る
争いは人の持ちもの奪いとるそんなことして何の得なし
力にて人を脅して苦しめて奪いとるなど最低のこと
お互いに困った時は助け合い補いあつて平和な世界

なんでまた世の中みだす人がいるみんな笑顔ですごしたいもの
決め事は世界の平和護ること人を傷つけ壊すことなく
思いやる心一つでどうにでも良いことだけが起ることのみ
かきまわしゴミを浮かせた濁り水すくいとらねばただの泥水
国連は大国だけのものとする自分勝手に物事進め
あまりにも世界の乱れ耳にして情けないやら悲しみ多い
世の中を我が物顔で取仕切る心まですしき人多くあり

死生観と現生について 川崎常喜

自死された子を持つひとによくもまあ神様はいるとか言えますね
ちまたでは病は気からと言うけれど「気」でも病は治せないもの
たましいをママのおなかに忘れた子これからママを守ってあげて

病室がいのりの息につつまれて体とわかれ旅に出る母

肉欲の意味を分けたり解きながらふたりはやがて塊となる

葬送の式に流れる讚美歌が無為な生きざまふと留まらず

ただぼくはきみが主役の劇中で端役なわけでしかたがなくて

くやしくはないといったら嘘になる耐えしのぶのも戦いだから

こうこうと十字がひかる病院のなかで誰かが戦っている

くらやみにすべてを捨てた君の目が「ごめん」とつげた横浜の駅

さらば 甲村雅俊

疥癬にかかりし母と吾のふたり真夜の痒みに苦しみてをり

弥陀仏はわが驕慢を矯めむとす疥癬をしもわれにたまひて

子供向け万年筆にそにどりのブルーブラック・インキを満たす

「地中海」原稿用紙に字を書けば一流歌人となれる心地す

日曜の東京新聞連載の「ブツダを探して」楽しみに読む

身に巣くふダニとおさらばする為のイベルメクチン飲み下したり

いまさらの介護疲れかたらちねを怒気ふくませてわが詰るなり

晴れやかな正月三が日のあとすぐにむかふる祥月命日

一周忌いつものやうに仏前でお勤めいたす死者おもひつつ

ある朝に死への望みの消えてゐてさらば内なるタナトスポーイ

春よ来い 氷室敬子

第五中の黄色いイチョウの葉もえさかる若者の魂のごとく

ファンファンと焼けているアンパンのパンの味わいこの頃知りぬ

森に入った小鳥三羽なにかつついている木の実のくずか

あ、美味しいいつるつるお蕎麦美味しくて信州蕎麦はつるつるがいい
ガラス戸に雪の舞う冬の日からわれの孤独も凍りついていく
春よ来い微笑みのような桜の下にわれの一族をつつんでくれよ

シチュー 本田洋子

初相撲日本人より人気者ウクライナより一人渡り来て
餅辞めた喉につかえる心配ゆえに淋しそうに言う老夫婦かな
言うまいぞ冬がどんなに厳しくも夏の暑さはもっと辛いのだから
空の青もの皆枯れた公園に馬酔木の蕾小さく赤く
公園のベンチにすわり一人居れば階段軽やかにかけ登り来る人
空は青冷たい朝の公園の坂道をバスがゆつくり登り来る
杖持ちてブランコに腰かけてみる淋しいようなせつないような

悲しみは何処からやって来るかしら陽だまりに來ても癒されぬ吾
白湯飲めばこれぞ吾が道領きぬそれでけっこうそつと笑いぬ
そこ空けてわたししがシチューを創るからジャガイモホッコリ甘いシチューを
午前五時トースト食べてコーヒーを 滝行みたいなシャワーを浴びて
朝シャン後窓を開ければそこは白 雪の世界よふうわりふわり
これからが如月の寒さは本番よと言われたような雪景色なり

宗教難民

叱られて辞めさせられてあたふたと先輩呼び出し別れを告げる
だれの意志？ 家族の意志かあなたのか 納得ゆかぬあきらめきれぬと
戸塚駅の郵便局にてしたためる退会届け立春辺り
釈迦阿弥陀 写経読経 浄土教 日蓮真言 身を寄せるがいい
しばらくは無信仰この身を晒し素の自分をば寒気に晒し